

# 豫科練



No.479 令和5年

11・12月号

|                                 |    |
|---------------------------------|----|
| ○連載《シリーズ海軍及び予科練各種記念碑・慰霊碑》No.22… | 2  |
| ○連載《シリーズ海軍飛行予科練習生遺稿》……………       | 3  |
| ○茨城の戦跡紹介⑦……………                  | 4  |
| ○真珠湾攻撃50周年 たった一人の慰霊祭②……………      | 7  |
| ○ある少年特攻兵の記録②……………               | 10 |
| ○沖縄神雷特攻記①……………                  | 17 |
| ○雄翔館見学者所感……………                  | 20 |
| ○海原会寄付者芳名簿・お知らせ……………            | 22 |
| ○事務局日誌……………                     | 22 |

公益  
財団法人

海原会

高松宮妃下御歌  
霞ヶ浦に立ちて海軍飛行  
予科練習生を偲びてよめる

海を注に

はくわつめい  
敬事

きみら聲なく  
いく春やへし

わんご

高松宮妃殿下御歌

霞ヶ浦に立ちて海軍飛行  
予科練習生を偲びてよめる

海はらに

はたおほそらに

散華せし

きみら声なく

いく春やへし

この御歌は、高松宮喜久子妃殿下の御直筆で、有栖川流と申しあげ、妃殿下はその御宗家にあたられると承ります。

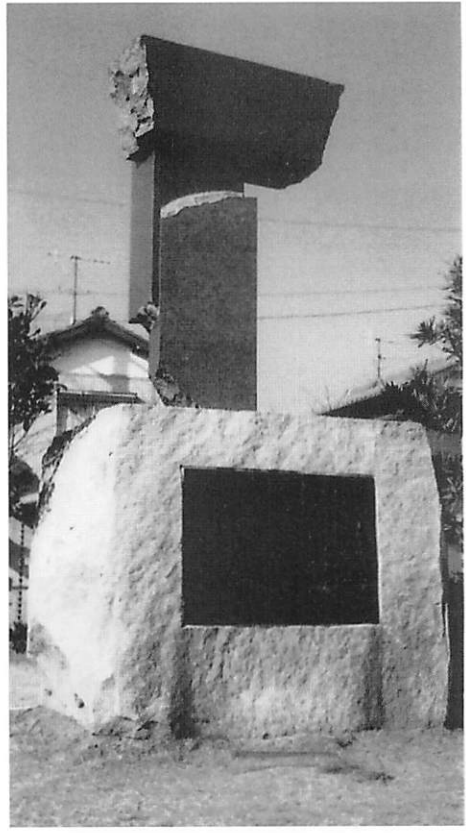
海軍及び予科練各種記念碑・慰霊碑 河和海軍航空隊の碑 No.22

河和海軍航空隊は、整備術教育担当の練習航空隊として前身の追浜空知多分遣隊（美浜町）を独立して昭和十九年二月一日に岡崎分遣隊を設置した。（後に岡崎空）

昭和十九年四月一日小松島空知多分遣隊を独立して、水上機操縦教育担当の練習航空隊として、第二河和海軍航空隊が開隊したのに伴って、翌二十年二月十一日に従来の航空隊は、第一河和海軍航空隊（司令 東 徹雄中佐（兵56））となった。

第一、第二河和空は、少年兵や予備学生、一枚の赤紙で妻子を残して召集された国民兵など、最盛期には、一万数千名の若人が祖国防衛のためこの地で日夜訓練に励んでいた。

戦後、河和会を結成、昭和五十年の慰霊祭で、記念碑建立の議が起こり、当時の歴史を物語る証として、有名彫刻家による作品を、記念の碑とし、美浜町の歴史の一駒とすると共に、ここに若人が闘った史実を後世に残すため、この碑を建立した。



- 所在地 愛知県河和町森下公園内
- 建立年月日 昭和五三年八月吉日
- 本碑、三谷 勲氏作品（二期予備生徒出身）
- 問合せ 飯塚 進作氏

神奈川県南足柄郡  
岩原四二四―五  
（〇四六五―  
七四―七三二九）

# 海軍飛行豫科練習生

遺書 遺詠 遺稿 辞世

## 遺詠

中瀬 清久 一飛曹 (19才) 宮城 (甲飛10期)

第一神風特攻隊若桜隊 零戦 セブ島発進 ダバオ海域  
昭和19年10月25日

海征かば水漬く屍と聞くものを

空征く我は白雲と散る

永峰 肇 飛兵長 (19歳) 宮崎 (丙飛15期)

第一神風特攻隊敷島隊 零戦 マバラカット発進 ルソン島東沿岸をタクロバンに向け索敵  
昭和19年10月25日

南海にたとえこの身は果つるとも

幾年後の春を思えば

谷 暢夫 一飛曹 (20歳) 京都 (甲飛10期)

第一神風特攻隊敷島隊 零戦 マバラカット発進タクロバン沖  
昭和19年10月25日

身はかるく努める重さ思うとき

今は敵艦にただ体当たり

# 茨城の戦跡紹介⑦

海原会参与

行方 滋子

今回は、茨城県水戸市内原町にあった「満蒙開拓青少年義勇軍内原訓練所」をご紹介します。

## 【満州開拓の背景】

昭和初期、日本の農村は天候不順による不作に続き、特に昭和四（一九二九）年の世界恐慌により疲弊し、深刻な問題となっていました。戦前に日本政府により進められていたアメリカ、ブラジルをはじめ南米諸国への日本人移民の入植移民数に段階的制限が加えられるようになり、日本は中国東北部に目を向け始めました。

## 【満州移民の開始】

昭和六（一九三一）年の満州事変後、昭和七年に満州国が建国され、日本政府は日本人が満州での農業耕作が可能かを探るため昭和七年から十一年まで試験的に農業移民を募集、一七〇〇余名を送出しました。

その結果、大量移民の送出が可能と判断し、時の広田弘毅内閣は、満州移民を重要国策として取り上げ昭和十一（一九三六）年から二十年間で百万戸、五百万人を満州に移民させる「満州開拓移民推進計画」を決議したのでした。

しかし、昭和十二（一九三七）年に日中戦争が始まり、計画の達成が難しくなってきたため、昭和十三（一九三八）年から「五族協和」「王道楽土」をスローガンに全国から十四歳から十八歳の青少年を募集し、満蒙開拓青少年義勇軍（以下、義勇軍）十二万人の送出

が計画され、その訓練所が全国唯一、水戸市内原町に置かれたのでした。

## 【義勇軍の募集】

義勇軍の募集は、「満州青年移民実施要領」により道府県単位で行われました（当時、東京は府でした）。応募資格は、「数え年十六歳（早生まれば十五歳）より十九歳までの身体強健、意志強固なる者」で、各道府県は割り当てられた義勇軍に応募した者は農家の次男、三男が多く、当時、家督は長男が継ぐものとなっており、次男、三男は耕す土地もなく大農経営に夢を馳せたのでした。

義勇軍は、二〜三カ月の基礎訓練を内原訓練所・河和田分所などで行い、訓練では、内務訓練・農事訓練・軍事教練・教学訓練などが実施されました。

訓練生たちは、満州での豊かな暮らしを想像しながら辛

い訓練に耐えていたそうです。そして、終戦までに延べ八万六五三〇人を満州へ送り出したといわれています。

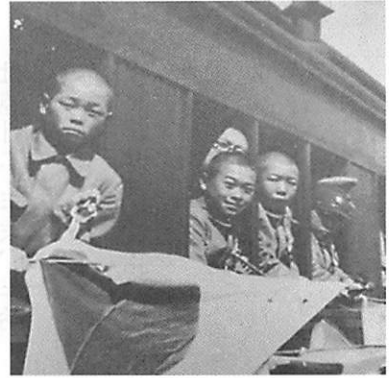
戦争が拡大するにつれて、徴兵される年齢も下がり、訓練生達も十七〜八歳になると現地招集され、多くの犠牲者がでたり、戦後シベリア抑留されるなど過酷な状況下におかれ、郷里に帰れなかった人が訓練生だけで、二万四千人いるといわれています。

## 【内原訓練所】

内原が建設地となったのは、一定面積が確保でき、訓練に必要な指導者の確保や東京からの距離、交通の利便性があることなどが条件となり、政府に青少年の満州開拓の必要性を進言した中に加藤完治（のちの訓練所長）がおり、加藤が経営していた私学農業学校がこれらの諸条件を満たしていたためと言われています。



◆故里よさらば、いざ内原へ



【内原の生活】

◆日輪兵舎

内原の宿舎は、円筒形の外壁に円錐形の屋根がのる構造で、その形状と日本国旗の連想から「日輪」の名がつけられました。建物内部には中心に一本の柱が立ち、傘のように放射状に材が広がって、円錐形の屋根を形成していました。

訓練所では、訓練生の宿舎と教室を兼ねて用いられました。

◆基本訓練

(学習・武道・体育)

厳しい開拓の困苦に耐えられるよう、事々物々についての修練が心がけられ、午前中は学科、教練、もしくは建築作業、午後は農場作業、もしくは開墾作業が行われました。



◆所外訓練

訓練所から外に出て作業に従事するものです。

◆特技訓練

中隊の中から若干名を選出するか、または当番制によって行われ、訓練には士気を鼓舞するラッパ隊、畜産部の乗馬訓練などがありました。

ぼくは

満州へ行きます…。



【われらは若き義勇軍】

詩 星川良夏

一 われらは若き 義勇軍

祖国の為ぞ 歟とりて

万里涯なき 野に立たむ

いま開拓の 意気高し

二 いま開拓の 意気高し

われらは若き 義勇軍

祖先の気魄 享けつぎて

勇躍夙に さきがけむ

打ち振る腕に 響きあり

打ち振る腕に 響きあり

三 われらは若き 義勇軍

秋こそ来れ 満蒙に

第二の祖国 うち樹てむ

輝く緑 空をうつ

輝く緑 空をうつ

四 われらは若き 義勇軍

力ぞ愛ぞ 王道の  
旗ひるがへし 行くところ

見よ共栄の 光あり  
見よ共栄の 光あり

【戦後の状況】

戦後、内原訓練所は、満州から帰国した開拓者や義勇隊員を一時収容する休養施設となつたのち、その役目を終えました。

現在は、当時の様子を思い起こさせるような遺構はほとんど残っていませんが、「満蒙開拓青少年義勇軍内原訓練所之碑」が建てられました。(水戸市小林町一一八六一八九)

また、訓練所から内原駅に続く道に植えられた桜並木は「渡満道路」と呼ばれています。

さらに、義勇軍の歴史を伝えることを目的に、二〇〇三年に「内原郷土史義勇軍史料館」が開館しました。

【内原郷土史義勇軍資料館】

住所・水戸市内原町一四九

七一一六

この資料館は、義勇軍関係資料を中心に、「交流ゾーン」、「郷土ゾーン」、「義勇軍ゾーン」の三つに分かれています。義勇軍の設立から満州での生活までを、実際に使用された品々や写真、フィルムなどで詳しく紹介しています。

◆利用案内

- ・ 開館時間・午前九時から午後四時四十五分
- ・ 休館日・月曜日（月曜祝日の場合は翌日）、年末、年始
- ・ 入館料・無料

◆交通案内

- ・ JR常磐線内原駅から徒歩約二十五分
- ・ JR常磐線内原駅からタクシーで約三分
- ・ 常磐自動車道水戸インターから車で約十分



【地蔵院】

住所・水戸市内原町九〇六

◆満蒙開拓殉難者の碑

厚生省中国引揚業務で義勇軍だと判明した遺骨二十六体、内原訓練所での死亡者九体、武見池工事の殉難義勇軍二体の計三十七体が合祀してあります。

◆聖母観音像

元義勇軍寮母の会によって桜ヶ丘拓魂公苑に建てられていたものを、拓魂公苑東京都移管にともない地蔵院に移されました。



【本法寺別院】

住所・水戸市河和田町四三

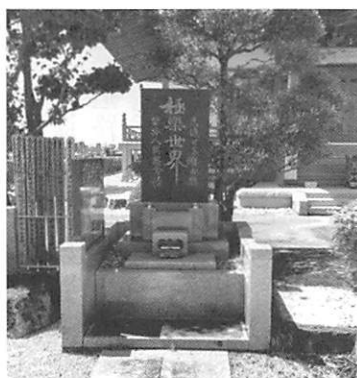
八二一一〇一

◆「極楽世界」

昭和二十（一九四五）年八月以降、黒龍江省・哈爾濱市（ハルビン市）新香坊（しんこうぼう）日本人収容所や、北満の地で非業の死を遂げた拓友や開拓関係者の慰霊のために哈爾濱郊外に建てられた墓碑を二〇〇三年四月に満州開拓発祥の地、内原訓練所河和田分所跡地の本法寺別院に移して安置されました。

◆「拓魂」の碑

満蒙開拓青少年義勇軍訓練所河和田分所義勇軍農場跡に落慶された本法寺別院境内に義勇軍慰霊のため、地元義勇軍関係者有志によって平成三年八月に建立されました。



## 【参考文献】

◆内原郷土史義勇軍資料館

◆写真集満蒙開拓青少年義勇軍

◆インターネット

## 真珠湾攻撃五十周年

### たった一人の慰霊祭②

第四代理事長

菅野 寛也

五十年目の、真珠湾での慰霊祭の余韻がまだ冷めやまぬ三月、ハワイでお世話になった和尚さんの一人が、突然静岡へ来られた。日蓮宗ハワイ別院の小川如洋師で、ハワイ方面日本海軍戦没者の霊簿を祀られている方である。賤機山山頂（浅間山山頂）へご案内し、日米双方の碑に参詣され、感慨無量と言って帰られた。更に、二か月後に今度は天台宗の荒了寛師が来静され、又山に登られた。宗派が違ふと来日される日も異なるらし

いが、さすがに参拝される時は、「重み」を感じさせる方々である。共に下山されてから、浅間神社へ挨拶されたが、神社でも事情を知って宮司さんたちが、大変丁寧に案内、応対を下さり、宗教人としての器量を見せて下さった。

そして、荒師が来られた折に、八月十五日（ハワイ時間）に灯籠流しをするから是非いらっしゃい、とおっしゃった。「静岡空襲の犠牲者と、B29戦死者の灯籠を流して、冥福を祈りましょう」と言う訳である。

ぜひ行きたいと思ったが、その時期は一番ホテルの予約が難しい時でもある。でも、何とか行けるなら、灯籠流しは勿論の事、今度はアリゾナ記念館でセレモニーをしてきたいと考えた。そうなるかと、前回お逢いできなかったアメリカ側の人達と連絡をとらなければいけない。俄かに忙しく、と言っても英文のやりと

りとなると海外の事でもあるし、そんなに簡単にできる訳ではない。又、失礼があってもいけないので、英語の教師でもある弟の助けで、アリゾナ記念館のMagge館長やSURVIVORS ASSOCIATION等へのコンタクトを始めた。ホテルの手配等も済み、更に「海軍記念日」に戦艦「三笠」でお目のかかった在日米軍司令官Hernandez少将がハワイの太平洋艦隊コマンドー、Mr. Mike Tanzeyに、私の推薦文を書いて下さったので、何とかなるだろう、という情勢になって来た。前回とは大違いである。更に、八月になってアリゾナのMagge館長が、広島、長崎へ来られた、との記事が読売新聞に出ていた。「広島に来て痛感した。憎しみで、憎しみを消すことはできない。」と、大変感動的な記事である。「アリゾナ」の館長ならではの言葉だと思った。私の

手紙とすれ違いになったかも知れないので、SSSの川西重役に頼んで、中国新聞の方にFAXで手紙のコピーを送り、趣旨を伝えていただいた。

そして、Mr. Fiske等真珠湾生存者協会の人々からも、一緒にセレモニーをやるうとの連絡があった。

いよいよ出発の日が迫って来たときに、戸塚代議士より電話があり、「八月十五日の灯籠流しに参列できそうだ。」との事である。以前から慰霊祭の事で、大変お世話になっていたのだが、公務多忙で無理であろう、と思っていたので、一寸驚いた。

思いがけない事であったが、国会議員の訪問となること、外務省とハワイ領事館が連絡を取り、アリゾナにも公式な通知をしてくれたので、大助かり。一段と当日のスケジュールがスムーズになって来た。私達は、一足お先に出発した。運良く座席が左の窓

側だったので、着陸時にオワフ島上空よりパールハーバーが見渡せた。五十年前、日本海軍航空隊の搭乗員が見た情景が、このようであったかと思ふ位に、真珠湾のフォード島を囲んで、きれいに軍艦が並んでいる。

あれが「戦艦横町」かと思つているうちに海上に白い四角な建造物を認めた。あれこそ「アリゾナ記念館」だと、八ミリビデオで撮影しているうちに、間もなくホノルル空港に着陸した。出迎いの車の運転手が、懐かしそうに「菅野先生ですね。」と声をかけてくれたので、驚いた。同じ旅行社の手配なのだから、当然と言えば当然かも知れないが、昨年も迎えに来てくれた人だった。「この前はご苦労様でしたね。先日も新聞で、先生の記事を読みましたよ。有難いことです。先生は有名人ですよ。」と言われ、お世辞にしても、日系人には喜んで貰えたかな？と嬉しかった。

又、通訳代わりにと、アメリカ留学中の次女や家族を同行したので、思いがけず「親父の立場」を立ててくれた。

新聞とは、出発前に荒師が送ってくださった、ハワイのEAST-WEST JOURNALの事である。「怨親平等」との題で、静岡空襲、伊藤福松氏や私の事、灯籠流しの事等を書いて下さった、と感謝していた所だ。

八月十五日（終戦の日）、早朝より領事館の中津川さん（浜松市出身）が同行して下さり、一〇・三〇アリゾナビジターセンターを訪れた。

Mag ee 館長や連絡をとっていた人達とお逢いして、約二十分の映画説明の後、専用のボートでメモリアルに向かう。映画は「真珠湾攻撃が如何にして行われたか」と当時の歴史的説明であるが、日本人としては辛いストーリーである。

映画が終わると、周囲のアメリカ人の視線が気になって来

る。然し、Mag ee 館長や関係者が丁重にエスコートして下さるので、有難い。ボートには、約二〇〇名位が乗船しているが、ほとんどアメリカ人で、少数だが我々の他に、日本人も居た。

メモリアルに着いて、B29 遺品の水筒を取り出したらMag ee さんに「バーボンが入っているか？」と聞かれた。静岡でのバーボン献酒の事を知って居られるからである。「メモリアルでは飲酒はいけないと聞いているのでエンプティだ。」と答えたら、それではと、メモリアルの水を入れてくださった。MARBLE ROOMの壁に、

一七七名の戦死者の名が刻み込まれて居り、その前にMr. Fiske が小さな花束を捧げ、私も「水筒」を供えて、戸塚議員と並んで拝礼した。傍らでMr. Fiske が、鎮魂ラッパを吹奏された。Mr. Fiske は空襲当時

一九歳で、戦艦ウエスト・バ

ーニアの艦橋に居たラッパ手であった、との事である。それ迄事情を知らないで周囲で見ていた人達も、Fiske さんが、涙ながらに説明を始められたら、シーンとなつてしまった。そして、今度は

メモリアルのデッキから、一か所だけ艦体が見られるようになっていて、四角いホールの手摺り越しに、Mag ee さんFiske さんと一緒に水筒の浄水の献水を始めた。事情を知った人達から握手を求められたり、写真を撮られたり、一寸面食らったが、これが良い意味でのアメリカ人氣質であろう。

とにかく、これでB29搭乗員の霊は、祖国へ帰れたのではないかと信じ肩の荷を下ろしたような気持であった。

Mag ee 館長に、ゆっくりお礼を述べる暇もなく、Fiske さん達に「パンチボールの墓地へ参拝したいが一緒に行かないか」と言われた。



八月十五日、終戦の日だからB29の水筒で供養したい、との事、勿論異存なく参拝させて頂くことになった。

又、Mageeさんに「アリゾナの水」を入れて頂いて出発したが、運転手が「あそこへは駐車できません。」という。

パンチボールは、第二次世界大戦の戦没者の墓地であるが、残念ながら心無い日本人が、埋葬者の上を無神経に歩いたり、騒いだりしたので、立ち入り禁止、駐車禁止となつてしまった。だが、Fiskeさん達が先行して警備に話され、特別に許可してもらった。

我が子を戦場で失った女神の像の下方にある慰霊碑の前に、小さな花束を捧げ、水筒の中の「アリゾナの水」を献水し、Fiskeさんが、鎮魂ラッパを吹奏して「小さな慰霊祭」が終わった。Fiskeさんが、何とも形容し難い涙顔で握手を求め、大きな体で

抱擁された。その態度に、我々も言葉が出なかった。

これでアメリカ側とのセレモニーは終わった訳だが、Fiskeさんが、「十月に日本の搭乗員と一緒に、土浦で慰霊祭を行う予定だ。是非又、お逢いしたい。」との事で、再会を約束して別れた。

一息つく暇もなく、夜は灯籠流しである。ハワイの灯籠流し、数年前より始められ、ワイキキの裏通りとも言われる。アラワイ運河で行われる。運河の川幅はゆつたりしているが、流れがほとんど無いので、小舟に灯籠を積んで、ゆつくりと曳き船で引張っていく。西へ向かって、丁度極楽浄土へ向けて流して行く訳である。スタート地点の岸辺に祭壇が設えてあり、荒師を始め関係者が、威儀を正して座って居られる。灯籠を流す前に、日系の人達や地元の人達のお祭りがあった。

太鼓や踊り、歌等仲々賑やかであったが、中に一組、初

老の紳士達の一段があった。これが名高い一〇〇連隊（四四二部隊）の人達で、日系二世のために、アメリカへの忠誠を尽くし、ヨーロッパ戦線で勇敢に戦った部隊の生き残りだそうだ。

司会者は、英語と日本語で説明して、進行させていく。連邦議員や地元の政治家、総領事等がスピーチされた後、戸塚さんも日本の議員として紹介され、荒師の御祈祷の中で、次々に祭壇へご焼香された。

私も、ご焼香するように言われたが、プログラムの順番になつても名を呼ばれないで、これは省略されたかな？と思つていたら、最後に司会者が、静岡空襲とB29について説明された。そして、ドクター菅野と紹介され、一瞬戸惑つたが、B29の水筒を取り出して祭壇に供え、ご焼香した。

とたんに拍手が起こり、照れ臭かったが、このために来たのだから落ち着けと自分に言

い聞かせた。

ご焼香が終わり、灯籠流しが始まったので、静岡市民と、B29戦死者の書かれた灯籠を探したが、人垣で近づけず遠くから見送った。その後、総領事公舎へ表敬訪問の予定になつていたので、帰り支度をしていくと、地元のテレビ局がインタビュの申し込みに来た。「領事館へ行かなければならないから、明日ではどうか？」と話したが、「灯籠流しをバックにして、今の話（静岡空襲）を聞かせてほしい」との事なので、止むを得ず領事館の方へは了解を求めて、テレビ局の人と対談することにした。

確かに「T.P.O」が大場事であろう。その時、その場でなければ、とても第三者には理解されないこともあるかも知れない。どんな編集されて、どんな放映されたか、まだテープを拝見していないが、アナウンサーも何とか理解してくれたようで、意図する所

を放映して下さったと思う。この一文を読まれた方も、そんな所を御理解願いたい。

漸く、インタビュアーが終わり、領事館へ送って頂く車中でアナウンサーが、「私の祖父が、国後島の村長で昭和二十年八月十八日侵攻してきたソ連軍に連行され、以後消息不明です。北方四島の会等で調べて頂いたがわからないのです。」と言うので、「帰国したら、手をつくしてみますよ。」と約束して別れた。この人にとつては、まだ終戦が訪れていなかったのです。

帰国後、戸塚議員のご尽力で消息が分かり、早速知らせてあげたが、やはりパールハーバーは歴史の凝縮された所である

まだまだ、これからもやるべき事がありそうだ。

この原稿を書いた後に、海軍の叔父\*が亡くなった。

中学、大学共に先輩であり、特にお世話になった人だが、終戦直前に学徒出陣で、人間

魚雷「回転」の搭乗員となり、あと一週間戦争が続けば南太平洋で突撃すべき命令をうけていたそうである。

終戦により幸運にも復員されたが、出撃時の心境を恐る恐る尋ねたことがある。あまり多くは話してくれなかったが「このような特別攻撃をしなければならぬのは戦況が不利になった証拠で勝算ありとは思えない。だが、俺たちが出撃して敵に損害を与え、心肝を寒からしめる事ができれば、講和条約が少しは日本に有利になるだろうと信じていた。」朴訥に語ってくれた。叔父に別れを告げるときにこの事が鮮烈に思い出されて、「このような先輩が居たのだ。」と言うことを後世に伝えるのが、我々の義務だと思つた。批判ばかりする世代に、先ず歴史的事実を伝えるべく筆を執つた次第である。

\*細井庸司(旧制中川)

静岡中学(五十四期)

日大工学部

学徒出陣

対潜学校(六期)

終戦時中尉

続く

この記事は、海原会懸賞文に応募された作品です。

(事務局)



小野 一

おばあちゃんとの出会い

私にとつて特に楽しい想い出は、日曜日毎に村のある旧家に遊びに行つたことである。その家には、六十才くらいのおばあちゃんが居て、私を大変可愛がってくれた。私が年もわずか十七才で、親元を離れ、遠い北国からはるばるこの四国の果てまで来ていること、さらに特攻隊員として、

いつ死ぬかわからぬ身の上であつたため、何かと不愜に思つたのであろうか。  
昼食時になると当時珍しかったカレーライスをご馳走になつたり、縁側で昼寝をしたり、五衛門風呂に入り、おばあちゃんに背中を流してもらつたり、私も又おばあちゃんの肩をたたいてあげたりした。それは、本当に自分の家に居るような、楽しい雰囲気であつた。

出撃命令

七月のある日(はつきりした日は思い出せない。)同僚と砂浜で昼寝をしていたところ、突然、非常呼集がかつた。何事だろうと思つて、急いで集合した。隊長が緊張した面持ちで「敵艦隊が土佐湾に向けて侵入しつつあり、明日〇一〇〇出撃す。これより十二時間待機につけ！」と、いつもよりかん高い声で命令した。われわれの間にサツと

緊張感がみなぎった。いよいよ十二時間後には出撃である。

その時私は一瞬ブルツと武者震いにも似たものが走ったが、そのあと自分でも不思議に思う程冷静で、「とうとう来てしまったか。」という気持であった。

われわれは急いで宿舎に帰り、かねてより用意していた通り、下着をふんどしの果てまで、洗い立てのきれいなものに替えた。さらに飛行服に身を固め、日の丸の鉢巻きをしめ、日本刀を片手に持つと、とたんに、身も心もキリツと締まり、「よし、やるぞ！」という気持ちになった。それから、今まで溜めておいたタバコや日用品を持って、世話になったおばあちゃんに別れのあいさつに出かけたのである。途中、村人に何人か出会った。

その時すでに村の人達にわれわれの出撃命令が知れ渡っていたらしく、いつもは行き会っても、にこやかに時候の

あいさつなどを交わしていたのだが、その時点からわれわれに対する対応が全く違うのである。大人から子供まで、

私を通ると道路の脇に立ち止まり、ひとことも言わないで、厳肅な面持ちで深々と頭を下げるのである。特にその日は、まるで神にでも対峙する時のように敬虔な眼差しであった。私はすっかりドギマギしてしまつて、緊張して返礼した。

おばあちゃんの家の玄関口で、「おばあちゃん、明日の午前一時に出発です。今まで大変お世話になりました。おばあちゃんも体を大事にして、自分の分まで長生きしてください。」と言ひ、直立不動の姿勢で拳手の礼をすると、しばらくポカンと私の顔を見ていたおばあちゃんが、板の間に顔を押し付けて、「なぜ死んのか！なぜ死んのか！」と大声で体を震わせながら泣きじゃくつた。余りの号泣に、私はびっくりして「おばあちゃん、泣くな、泣くな。」と

肩をたたいて慰めたのである。その時の、おばあちゃんの狂つたような泣き声は、今でも耳に残っている。

私はその時おばあちゃんが、なぜ、そんなに泣き狂うのか不思議でならなかつた。たぶん「しつかり頑張つてくださいな。」と励まされるものとはかり思つていたのである。若いというか、なんとというか、今にして思えば、人の心の微妙もわからず、余りにも単純な少年らしい心であつた。又それだからこそ、簡単に死地にも飛び込んで行けるのかもしれない。

### 生きた消耗品

その間にも基地隊員は忙しく働いた。洞窟からつぎつぎと震洋艇を引き出し、海岸で爆薬やガソリンを積み込む。艇の中に二八〇疋の爆薬を人力で積み込む作業は大変な仕事である。私が洞窟に着いた時、私の艇はすでにその作業

も終わり、海に浮かべて整備員がエンジンの調整をしていた。私と同じ艇に乗る搭乗員と共に艇の点検をしたが、その時、ふと頭をかすめたことは、途中エンジンが止まることとはないだろうか。

外洋での襲撃訓練もしていないので、暗闇と波浪の中を無線もなく、果たして敵に接近できるだろうか。又例え敵を補足出来たとしても、体当たりをする前に相手から攻撃を受け、破壊されてしまわないだろうか。という攻撃成果に対する不安と危惧の念であつた。どうせ死ぬのなら、少しでも戦果をあげ、価値のある死に方をしたい。それがわれわれ隊員全体の願ひだつたと思うのである。

出撃準備も終わり、遅い夕食をとつた。最後の晩餐である。主計兵の心づくしの料理に清酒が一本ついた。別れの盃を取り交わしながらお互いの健闘を確かめ合う。笑い声も出る明るい夕食であつた。

私は遺書を書かなかつた。同僚の中にも遺書を書いた人は居なかつたようである。それは、われわれの特攻兵器の貧弱さに、ある種のコンプレックスを持っていたことと、攻撃成果に対する不安から、余り勇ましいことはかけないという気持ちが多分にあつたからであろう。

事実、あとで知つたことであるが、海軍上層部においても震洋特攻隊の成功率については、十分の程度より期待してはなかつたという。われわれは生きた消耗品だつたのである。

夕食も終わり、深夜出撃のため早く就寝するよう指示を受け、われわれは洞窟の中でごろ寝した。毛布を胸まで掛けて眼をつぶると、故郷の父母や弟妹や祖父母の姿が目に見え浮かぶ。いま頃どうしているだろうか。体当たりして戦死すれば、階級が二階級特進するそうだが、地方の新聞にそのことが載るだろうか。赫々

たる戦果と、自分の名前でもでなければ両親の名誉ともなり、その事が、せめてもの親孝行となるであろうから。

(体当たりの瞬間のことは考えないことにしていた。又、考えてもどうにもならないことであつた。)

そんなとりとめのないことを考えているうちに、いつしか眠りについたらようである。あと数時間後に確実に死ぬというのに、なぜ、眠ることが出来たであろうか。今考えるときまことに不思議でならない。

### 出撃せず

目をさますと、壕の外がしらじらと明るみ、いつしか朝になつていた。オヤツと思つた。一瞬とまどいを感じながら、すでに起床している隊員に事情を聞いたところ、出撃命令が解除になつたというのである。喜んでよいのか、悲しんでよいのか、複雑な気持ち

のまま外に出た。早朝の基地は静かなたたずまいを見せ、昨夜のあわただしが嘘のようであつた。

村の人々に会うのも、なんだか気恥ずかしく、しばらくは村の中に出ないようにしていた。出撃取り消しを一番喜んでくれたのはおばあちゃんである。次の日曜日おばあちゃんの家を訪ねると、「よかつたのう、よかつたのう。」と喜びを体一杯に表わし、抱きかかえるように私を迎えてくれた。

それから又以前のような柏島の生活が続く。そして真夏の柏島はますます素晴らしくなつてゆく。夜には大きなホタルが飛び交え、幻想を誘うのである。

### 敗戦時の混乱

八月十五日、天皇陛下のお言葉が放送されるといので、全員ある民家の庭に集合した。たぶん、戦争完遂の励ましで

あろうと耳を傾けていた。雑音が多くて意味の聞き取れないところが多かつたが、どうも戦争に敗けたらしいと薄々わかつたのである。

敗けたとはどういうことであらうか。予科練を志願して以来、国のため、同胞のため死ぬことだけを、そして、悠久の大義に生きることだけを考へてきた。それが例え、天皇の命令でも、はい、それでは戦争を止めます、とは簡単に言えないのである。特に特攻隊に編入されたことにより数ヶ月われわれは、絶えず死と直角に対決して来た。

そうした異常な生き方に順応してしまつた心は、おいそれと平常な心に戻るわけにはゆかないのである。誰かが「海軍は負けてはいない。あくまでも戦うのだ。」と叫んだ。そして皆で徹底抗戦を誓い合つた。私はその夜床に入ると、ふっと「生きられるかも知れない。」という気持ちがあつたが、すぐ首を振つて、

それを打ち消した。

よく十六日午後、土佐湾の全震洋隊に出撃命令が出た。われわれも一斉に出撃体制に入った。そのあわただしさの中、一つの事故が起こった。或る洞窟から一人の基地隊員が火達磨のようになって飛び出し、そのまま海へ飛び込んだ。艇のエンジンを点検していた整備員である。燃料タンクからガソリンが漏れて、そのガスにセルモーターの火花が引火し爆発したのであった。間もなく洞窟の入り口から火が吹き出した。中には四隻の震洋艇が格納されている。すでに爆薬の装備が終わっている。爆発するかわからない。われわれは急いで山陰に退避した。入り口から吹き出す炎は、ますます強くなる。

それから約一時間、陽も傾いた頃、山も割れるのではないかと思うような大きな爆発音がし、その反動で二隻の艇が海まで飛び出した。幸い信

管が抜いてあったので、爆発は二隻で終わったのである。

ちょうど同じ頃、偶然にも同じような事故が、われわれの基地より九十軒ばかり北東にある、夜須町手結海岸の第二百二十八震洋隊の特攻基地でも起こっている。その事故はきわめて悲惨であった。洞窟から引き出した一隻の震洋艇が、整備中にガソリンに引火し、積んでいた爆薬が暴発した。その衝撃により他の震洋艇が次々に誘爆し、そのため隊員の体がばらばらに空中に舞い、遺体は半径五百米に散乱し、さながら地獄絵図のようであったと言う。

この事故で搭乗員、基地隊員合わせて百二十六人が死亡したといわれている。しかし、われわれは当時、そのような事故があったことを全く知らなかった。

### 崩れゆく決意

われわれの事故は、軽傷一

人と震洋艇二隻の損害に終わり、夕方まで一応出撃準備を完了し、翌早朝の出撃を待ったのである。しかしその出撃も結局うやむやになり、なにがなんだかわからないままに、あくまでも戦うという姿勢が徐々に崩れてゆく。そして、ある時は無性に帰りたくなったり、又ある時は海軍の名誉にかけて戦わねばと思ったり、その時々により自我が大きく揺れ動いていた。使命感を失い、心の支えを無くした少年達に簡単に心の整理が出来なかつたのである。

われわれの中には、いらだたしい気持ちのままに酒を飲んで暴れる人もいた。私自身どうしようもない、やり切れない気持ちを持って余り父から買ってもらった虎徹（日本刀）を振り廻して、立ち木を切つて歩いたりした。

それから数日後、隊長は皆を集め「これからの日本はどうなるかわからないが、くに帰つて家族のために頑張る

うではないか。今まで鍛えた軍人精神を日本再建のため役に立ててもらいたい。」という意味の話をした。日本再建という大義名分が成り立ち、死ぬ必要がなくなつたのである。私達は身の周り品をまとめて帰郷の準備をした。

### 帰郷

島を出発する時、おばあちゃんとの別れはとでもつらかつた。おばあちゃんは目を涙をうかべ、われわれの船が見えなくなるまで見送つてくれた。

戦後、おばあちゃんとは毎年年文通を取り交わし、お互いの安否を気づかっていたが、もう年も年だし、早く再会したいと思いつつも、訪れる機会をつかめぬまま、いたずらに時を過ごした。しかし、なんとしても生きている間に一度会わねばと、昭和四十八年春、二十八年ぶりに再び柏島を訪れたのである。しかし、



その時すでに遅くおばあちゃん  
は死んでいた。奇しくも、  
私が到着した日は死亡してか  
らちようど四十九日目の法事  
の日であった。

私は旅装もとかず、そのま  
ま墓へ向かった。「おばあち  
ゃん、もつと早く来ればよか  
ったな、ごめん。」私は墓に  
手を合わせ、心から詫び、そ  
して悔やんだ。家族の人の話  
では、おばあちゃんは私の事  
をいつも話していたそうであ  
る。仏壇の上に飾られたおば  
あちゃんの写真が「よう来て  
くれたのうし。」と私に語り  
かけたのである。

さて、われわれ震洋隊は愛  
媛県の宇和島で解散した。青  
森へ帰る途中列車が混み、な  
かなか乗れなかったが、貨物  
列車などを利用してようやく  
帰ることができた。

青森駅に到着してみると、  
青森市は一面の焼野原で、し  
ばらく茫然と立ちすくんだ。  
焼け跡に建っているのは、わ

ずかな土蔵と焼トタンの小屋  
ばかりであった。幸い焼け跡  
の中に私の父母が小屋を建て  
て待っていてくれており、久しぶ  
りの再会を喜び合ったのであ  
る。

復員後、大手の建設会社に  
勤めたが、予科練で鍛えた気  
力や体力を余りにも過信し、  
過労のために結核を患い、数  
年間病床に伏した。そのため  
家族に大変迷惑をかけた。や  
がて健康を取り戻し、現在の  
職業訓練の仕事についたので  
ある。

### おりおりの感慨

戦後、折にふれて、かつて  
の予科練や特攻隊時代のこと  
を思い出すが、いろいろと考  
えさせられることも多い。

今、改めてふり返って見る  
と、その当時の私の心情は、  
自分が特攻隊で死ぬことによ  
り、戦局を挽回できるとは考  
えていなかった。ただ、国の

ためというよりは、むしろ、  
親や兄弟のためこの島の人た  
ちのため、そしてこの美しい  
日本の山河のため、自分で何  
かをしなければならぬ。自  
分が死んだあと、どうなるか  
わからないが、その人達が少  
しでもいいようになってくれ  
るならば、という気持であつ  
た。国体や天皇制護持などは  
ほとんど考えてもみなかった。

それでは私にとって特攻体験  
とは何か。それは「或る時代  
の或る時」、たとえ、それが  
のろわれた時代に、間違つた  
国策に踊らされたとしても、  
若い健康な肉体と、純粋な精  
神を持ちながら、常に死と直  
角に向かい合った数ヶ月間の  
日々は、私にとってまことに  
得難く、貴重なものであつた。  
そして、そのことは又戦後の  
私の生き方や人生観に大きな  
影響を与えていることも確か  
である。

私はこの年になつても、一  
部の政治家が国のためと称し

ながら、権勢欲、名誉欲にふ  
けつてゐる姿を見ると、とて  
も腹立たしい気持ちになるの  
である。若くして純粋な気持  
ちで死地におもむいた特攻隊  
諸兄に対し、恥ずかしくない  
だろうか。そのような政治家  
は靖国神社に参拝してもらい  
たくない。

私は日本が戦争に敗けてよ  
かつたと思つてゐるものの一  
人である。もし、戦争に勝つ  
ていて、軍人が威張り散らし、  
地主制度や財閥が温残され、  
日本がますます神がかりにな  
つてゐる姿を想像すると、り  
つ然とするものがある。

戦後、三十六年間、その間  
の平和と民主化は戦死した彼  
らの尊い犠牲の賜物であり、  
彼等が死を賭してわれわれに  
残した所産でもある。今一番  
平和を望んでいるのは彼等の  
魂であろう。平和を守るとい  
うことは、苦しいことであり、  
勇気のいることである。われ  
われ後に残つた者の使命と課

題は、如何にして平和を守るか、平和のために何をすべきか、である。

ところで、余り知られていないことであるが、われわれの震洋特攻隊は、戦争を終結させ、平和を早めるため大きな役割を果たしていたのである。

昨年、作家角田房子さんとお会いした際、阿南陸軍大臣の物語、「一死大罪を謝す」を執筆中の彼女は、その取材中にわかったことですが、と断わり次のような話をしてくれた。

「二十年六月八日の御前会議において、長谷川海軍大將より天皇に対し、海軍の水上进軍特攻隊（震洋隊）について報告されたが、天皇は少年兵達の体当たり戦術に大きなショックを受けたらしく、そのことが和平交渉を推進した一つの誘因になったようです。小野さんの震洋隊も対局を左右する大きな力になっていたの

です。」私はその話を聞き、われわれのかつての特攻隊が全く無意味ではなく、結果的には平和を早めるための力になっていたことで、多分に意を強くしたのである。このことは是非とも元震洋特攻隊の仲間知らせてあげたいと思っている。

### 三十五年ぶりの卒業式

昨年母校から、「卒業式をやつてあげたいが。」という連絡があり、オヤツと思つた。そういえば私はまだ卒業式をやつていなかったのである。

卒業証書は敗戦後自宅に届けられていたもので、いまさら、という気持ちもなくはなかつたが、好意を無にするのも気の毒と思ひ出席することにした。三十五年ぶりの卒業式である。式は若い卒業生と一緒に行くとういうことで、若干晴れがましい気持ちもした。代表として謝辞を述べる

ことになった私は、この際、戦争を知らない若い人達に、当時のわれわれのおかれた特殊な環境と、その心情を率直に伝えるべきだと思つた。

よく考えてみると、特攻隊で戦死した人々の中にも、私のように卒業を半ばにして軍隊を志願し、卒業式をやつていない人も多数いると思われるので、この機会に謝辞の一部を記載し、戦死した先輩達の霊に捧げ、鎮魂としたい。

謝辞「前略、返りみますれば、今から三十六、七年前、私は卒業を半ばにして、国を守るため、愛する家族や同級生、尊敬する先生方と別れ、校門をあとにしました。当時は戦争もすでに敗戦の色濃く生きて再び母校の校門をくぐることは出来ないものと覚悟していたのであります。

軍隊における教育、訓練はまことにきびしく、つらいものでありましたが、私達は母校の名を辱めないよう死力を

盡して頑張つたつもりであります。そして或るものは飛行機に、或るものは船に乗り、又或るものは銃をとり、命をかけて国のために戦つたのであります。

共に軍隊を志願した仲間には、若くして特攻隊員として戦場に散つた人も数多くありました。私達はこの仲間達のことを、決して忘れることが出来ません。思えば、彼等には権勢欲とか名譽欲など霞ほどもなく、ただ、ひたすら同胞を守ろうとする情熱と、いかなる代償も求めない純粹な行為があるのみでありました。それは逆上と紙一重のいわゆるフアナチズムと根本的に異質なものであり、その心情は真に尊いものであつたと思つております。

現在の日本の平和と繁栄も、その人達の尊い犠牲により築かれたといつても過言ではありませぬ。後略」

卒業式には、該当者四十五

人中十四人が出席した。式は順調に運び、校長先生より特別の祝辞をうけ、さらに若い卒業生の代表より、「先輩と一緒に卒業できて嬉しい。戦争を知らないわれわれに当時のことを教えてほしい。」と言われた時、私は胸の中で「よしよし」とうなずいた。

聞くところによると、私の謝辞は三千名の卒業生、在校生に或る種の感銘を与えたということである。

### 卒業式後日譚

卒業式数日前、私は謝辞の原稿を書き終え、声を出して読み返してみた。読んでゆくうちに涙が出てきた。そしてハッと思った。「お前は今、職業訓練の仕事につき、ノホンと平穩無事に幸せな日々を過ごしているが、はたしてそれでよいのか。そんなぬるま湯に入っているような生活が恥ずかしくないのか。」そ

う思うと、私は若くして戦死した人々に対し、なんだかすごく申し訳ないような気がしてきたのである。

「そうだ、今、自分はあらためて高校を卒業するんだ。若さを取り戻し、もう一度なにかにアタックしてみよう。もう一度、本当に社会のためになる仕事をしてみよう。」と深く心に決めたのである。

そして、高校を卒業したのだから、今度は大学に入つて勉強してみようと思ひ、小論文を書き、本部に申請したところ、運よく採用になり東京の或る大学で、四か月間研究生活を続けることが出来た。私の研究テーマは、中高年齢者に対する職業訓練のカリキュラムの改編である。遠く妻子と離れ、毎日研究室に同じこもり、何時間も細かい活字の数多くの文献を読みこなす、さらにそれを分析するというなれない作業は、向老期の私にとって目や頭の痛くな

るような大変な仕事であった。しかし、私は戦死した人々のことを想い出しながら、なにくそと頑張った。そして、二〇〇ページ以上にわたる論文を完成させることが出来たのである。

自画自賛のようで恐縮であるが、その論文は二、三の雑誌に発表され、思わぬ好評を得ているし、又中央の研究発表会では、特別発表という形で取り上げられた。そして、そのことが職業訓練の基本計画の策定に、少しでも役に立てば幸いだと思つている。

私にとって生涯の大事業ともいふべき論文の作成は、もとをただせば、若くして戦死した人々の靈魂が書かせたのかも知れない。そうでなければ、ものを書くという経験の少ない私には、とても書けるものではなかった。

私はあらためて、その英霊諸兄に感謝申し上げるべく、毎年土浦で行われている「予

科練戦没者慰霊祭」に、この秋初めて参加するつもりである。

### 震洋隊のアウトライン

最後に震洋特攻隊のアウトラインについて参考までに述べてみたい。(荒井志朗著「写真集、震洋特別攻撃隊」より)

震洋隊戦死(没)者二千五百名、配属地は南米ボルネオ、フィリッピン、中国本土、台湾、沖縄、九州、四国、房総半島まで及ぶ。震洋艇に別名④マルヨンとも呼ばれ、「一発必中、敵船を撃沈し、太平洋を震撼させる。」という意味がこめられている。敗戦まで約六千二百隻完成したが、実践における戦果は比較的少ないという。

### 【筆者プロフィール】

住所 青森県青森市

氏名 小野 一

(当時五十三才)

軍歴

昭和十九年四月一日 土空  
入隊

(甲十四期生)

昭和二十年三月末 川棚臨  
時訓練所に入隊 震洋隊とし  
ての特別訓練を受ける

昭和二十年五月 第八特攻  
戦隊第二十一突撃隊第三百十  
四震洋隊に編入、四国柏島に  
配属

昭和二十年八月末 除隊

当時 青森高等職業訓練校  
勤務

令和3年5月 水上特攻艇  
「震洋」の戦死者を祀る長崎  
県川棚町の「特攻殉国の碑」  
の近くに、震洋の原寸大模型  
を納めた展示館が完成した。  
元隊員でつくる「特攻殉国の  
碑保存会」が会員の高齢化で  
解散した後は、地域住民が碑  
の管理や毎年5月に開催され  
る慰霊祭の運営を引き継いで  
いる。

(編集委員)

完



(水上特攻「震洋」展示館)

### 沖縄神雷特攻記①

室原 知末

(大分県・特乙飛二期  
大正十五年生)

出撃命令下る

昨夕出撃命令を受けてより、  
今朝を迎えるまでの十時間足

らずの間に、すべての準備は完了していた。ただ、心の中の整理ができていなかった。本年初め、特別攻撃隊編成を言い渡されてからすでに三か月経っていたので、いちおう表面的には心の整理はついていたものの、深層心理の方向から曖昧なところがあつた。死という絶対的な現実を見極めようとせず、ややもすれば視線をそらそうとする日々であつた。

死は逃れる術のないものだと分かつていても、悪夢のように生へのあがきを繰り返す。私にも高邁な犠牲的精神ばかりが横溢していたわけではな

い。現に、離陸後の二時間五十分後には、悪あがきをしたほどである。  
生きながらえなければならぬ、と自分に言い聞かせる別の私。いや、潔くお国のために死ぬことだとささやく別の私。この内部葛藤を胸に抱いたまま、五月四日の朝を迎えた。

鹿屋基地の朝は、暖機運転(エンジン暖める)をする。出撃機の爆音で騒がしかった。朝靄たなびく高隈山が北の目を露を限どり、飛行場の草もしどどに露にぬれていた。その露を吹き飛ばし、土ほこりを巻きあげて、今日の出撃機が並んで見えた。

思えば三月二十一日、「非理法権天」「八幡大菩薩」の旗じるしを掲げ、離陸していった攻撃第七一一飛行隊の野中五郎海軍少佐以下一三五名、桜花隊の三橋謙太郎海軍大尉以下十五名の壮挙が偲ばれる。

「湊川だよ」と語った野中隊長の言葉―勝算のない作戦遂行を深く見通していた野中少佐の最後の言葉であつた。しかし戦局の挽回には、われわれの「桜花作戦」は、必要欠くべからざるものであり、また、これを遂行しなければならぬ段階に至っていた、と当時の飛行長中島正海軍少佐もその著『神風特別攻撃隊』

で述べておられる。

昨夜、八木田喜良海軍大尉は、「俺は貴様たちの隊長として、つぎの命令を与える。接敵行動については、出撃の機長に各々コースを示すから、そのコースに沿って沖繩本島西方から突入せよ。大陸寄りにコースを設定してあるが、大陸に接近しすぎると、帰投時の燃料に不足をきたすおそれがあるから注意するよ。それから、燃料は三千六百リットル積むから、むだなコースを飛ばなければ、基地に帰れるはずだ」

と自問してみた。否、この愚問には答えてくれそうにもない状況があった。よほどの強運がついて回らない限り、生還は望めなかった。沖繩本島周辺には、三月二十六日上陸開始以来、敵船団が蝟集しており、防御砲火もすでに整い、滞空警戒網も緻密に張り巡らされている。その中に編隊で突入する愚行だけは避けなければならぬ。

### 神雷桜花機出撃

午前五時〇〇分、野里にあ

る戦闘指揮所前に集合し、八木田隊長の訓示を受けたあと、目標艦艇の説明および碇泊地、電波管制区域、使用電波周波数など、詳細な打ち合わせを行って、台地にある飛行場へトラックに分乗して出発した。

発進準備完了機がつつぎつつぎ離陸していった。ところが、どうしたわけか、杉山濱治電信員（一飛曹乙飛十七期）

が、「水晶発振子が電波を発信できない」といって、発信子の交換に行っている間に、本日の出撃機七機のうち六機はすでに機影も見えなくなるほど西方の空に消えてしまった。間もなく発信子の交換も終わり、杉山一飛曹が作戦室との交信を確認するのを待って、甲斐元二郎機長（上飛曹・甲飛十期）に「出発よろし」の合図を送った。甲斐機長は操縦席のうしろに立ち、私と山崎優男操縦員（二飛曹・丙飛十七期）の肩に手をおき、「今日の出撃に、機の性能は

完全である。日ごろ訓練に訓練を重ねてきた俺たちだ。攻撃を終了したら、絶対に帰ってくるぞ。では、出撃」と声をかけてくれた。

滑走路東端の離陸地点でエンジン増速をする。地上整備員や隊長の一言に振る帽子を横目で見ながら、機は滑走路に滑走速度をましたが、なかなか離陸できそうになかった。それは、一トン八百キロの爆薬を頭部に装着した「桜花機」は、自重二トンに近いうえに、早朝の無風状態のために浮力がつかないのである。千六百メートルの滑走路を使い果たしても離陸できない、と観念しかけてみると、ようやく機がふわりと浮いた。六時〇五分離陸、野里小學校を脚下に見ながら、機はフラフラの失速寸前の状態で飛行している。あわや前方の山腹に激突——と思った瞬間、機は山稜をすれすれに飛んで、やっと鹿兒島湾の上空に



出た。

基点の開聞岳が後方に小さくなつていくのを見ているうちに、私の心もようやく定まつてきた。満十九歳を一期として、五月五日の誕生日を待たず沖繩の洋上に散華することも国家の大事の前には致し方ないことだった。

この日のために、猛訓練に明け暮れたこの数か月間の成果を、開花させる時期が来たのである。要は敵の目をかすめて目的地に到達し、「神雷桜花機」を目標に向つて発進させ、戦果を確認したら潔く母機もろとも、目標艦に突入するだけのことだ。これ以外の道はない。それが人間の生と死というものなのだ。「一機一艦刺しちがえ」ができれば男の本懐これに過ぎるものはないのである。

### ひな鷲時代

私は昭和十八年六月一日、岩国海軍航空隊に入隊し、乙

種(特)第二期飛行予科練習生を命じられた。

十一月中旬、予科練習教程をおえた私たちは、練習機教程を修めるべく、大村空へと転勤、他の分隊は台湾高雄空へ転勤していった。ところが、運というものは不思議なもので、台湾へ向かった同期生たちは、乗っていた船が撃沈されて海の藻屑と消えてしまった。峻厳をさわめた大村での訓練も無事終わり、十九年二月、私は実用機教程へ進むことができた。

中攻操縦員への道を歩むことになった私は、九六式陸上攻撃機による操縦練習に没頭した。宮崎市赤江町にあった宮崎空での四か月は、双発機による離着陸、編隊、計器飛行などで、ほかに机上演習や実戦訓練の航空戦教練、武威前路哨戒飛行であった。

航空戦教練は、実用機教程の最終を飾るにふさわしい編隊飛行訓練であった。目標は広工廠、徳山燃料基地および

呉鎮守府で、作戦内容は、編隊爆撃を加える仮設敵となり、目標上空に浸入して爆撃を加え、空戦時の避弾運動を習得する想定であった。

広工廠は、天候の都合で侵入できなかつたが、徳山の燃料タンク群を見かけたと思つたら、邀撃戦闘機の零戦が、私たちの編隊めがけて接近し、いわゆるつばめ返し戦法でかすめていった。その敏捷さと切り返しの鮮やかさに驚き、かつ感心しながら、実戦さながらの状況に背筋が寒くなるのをおぼえた。

十九年五月十七日、大分県佐伯湾に集結を終えた第一遊撃隊(長官栗田健男中将)は、一路比島へ向かつて出発した。この前路哨戒のために、私たち練習生は午前五時宮崎空を離陸し北上した。三機編隊の九機だった。佐伯湾上空に到達したとき、艦隊から「ミ」連送の発光信号が送られてきた。それは「味方識別ヲナセ」の意味である。それ

に応じて、機は左右に翼を振った。艦首を南に向けて航行中の「武威」を右手に見下しながら、大きく右旋回して艦隊に近づいていった。

高度五百メートルが哨戒飛行の高度である。武威の後方に続く空母群は、正規空母二隻と特設空母四隻であった。甲板に翼を折つて搭載されている零戦や艦爆を見た私たちは、この威容に目をみはりながら、武威上空を基点とする哨戒コースに入った。艦上通過の際、大きく翼を振り、進行方向前方六十マイルの哨戒についたが、日本の誇る巨大戦艦「大和」と並ぶ「武威」をまのあたりに確認することができた。排水量五万三千トン。小島のような艦尾甲板に見えた水上機二機、甲板を走り回る乗員の動きが手にとるように見えた。

対潜哨戒をかねたこの飛行で、私たちは艦隊の航行隊形を見ることができた。旗艦を中心に前方や側方に巡洋艦、

その前方に駆逐艦や水雷艦、水中に潜水艇を配置した堂々たる陣形は、これが初めてであり終わりでもあった。

南下する艦隊の目的地などは知る由もなかったが、十月二十三日から二十五日までの比島沖海戦で、撃沈されたことを聞いて愕然とした。不沈戦艦といわれた「武蔵」が沈没するということは、いかに戦闘がすさまじかったかを物語るものであると思つた。

六月十五日、第三十五期飛行術練習生教程を無事卒業した私たちは、翌十六日、航空本部の辞令によつて各地に転勤して行き、私は福岡県博多航空隊に教員助手を命ぜられた。自分では、技量練成のための再教育であつたと思つている。第十三期予備学生や、第十二期甲飛練習生、第十八期乙飛練習生の教務飛行に、後席に同乗して空中操作の細微にわたつて教育することになつた。

十九年十一月四日、私は第

七六二空、攻撃第七〇八飛行隊へ転勤を命じられた。

私が鹿屋航空基地に着任したときは、去る十月十二日から十六日にかけて行われた「台湾沖航空戦」の直後で、木造兵舎の二階の居住区に第一分隊、一階に第二分隊がいたが、搭乗員は数えるほどしかないなかつた。

当時、第七六二空に所属していた第七〇八飛行隊は、別名を「輝部隊」とも呼ばれている雷撃隊であつた。一式陸攻の尾翼には、「輝—762」の文字が書かれていて、輝部隊の威容を誇るに十分ではあつたが、転勤の途中、熊本駅で会つた下士官から「輝部隊ならイチコロ部隊だから、生きては帰れんな」と言われた言葉の意味が、鹿屋にきてもしばらくは分からなかつた。だが、一期先輩の江田政雄隊長の口から、凄惨を極めた台湾沖航空戦の模様を聞くことができた。彼は私にそのとき負つた額の傷を見せながら、

雷撃隊の一発必中の肉迫戦がいかに困難であるか、戦場離脱の可能性がいかに低いかということを語つて聞かせた。

台湾沖航空戦は夜戦であつた。雷撃隊の得意とする夜間雷撃は、時には成功もしたが、味方の損傷も多かつた。照明弾を敵艦隊の上空に投下し、その照明に向つて海上すれすれに飛行し接敵する。電波高度計によつて、低空時の接水は免れるとはいへ、魚雷発射後、艦上通過もしくは急旋回避退のいずれにしても敵に腹を見せることになる。そのため、射撃される面が広がつて被弾率が極めて高い。江田隊長は戦場離脱には成功したものの、夜間のことで自機の位置を誤り、鹿屋上空に帰投したつもりが九州西海岸の甌島上空で燃料が尽き、致し方なく洋上に不時着したという。額の傷は不時着の際の負傷であつた。彼は意識不明になつているところを漁師に助けられ、島の診療所で治療を受け、

七日目に基地に帰つたが、同僚は足のある幽霊が還つてきたといつて、皆、肝をつぶしたという。彼の話を聞きながら、私はつくづく彼の運の強さに感嘆した。

続く

### 雄翔館見字者所感

心より痛々しく存じます。

おやすみなさい。

令和四年十二月

土浦市 土屋様（八四歳）

合掌 すこやかにお休み下さい。

令和四年十二月

東京都（無記名）（八七歳）

開戦記念日の今日、ようやく拝館することができました。飲水思源「井戸の水を飲む時掘つた人の苦勞を忘れる

な「まさにそのとおり幾多の若者の犠牲に今の日本があることを忘れてはなりません。もう入り口から涙が落ちました。

令和四年十二月

七ヶ浜町 鈴木様

(六九歳)

予科れん生の一人一人が皆をかけて戦った歴史が保存されていて、いったい何が起きたかなど書かれていてよかったです。

令和四年十二月

住所記載なし 島田様

(一一二歳)

上に一人一人しっかり名前と写真があつて切なかった。飛行機のもけいや刀などがあつてよく分かった。

令和四年十二月

住所記載なし 松本様

涙なしでは、見れません。した。今の平和を、ありがたく心にきざみます。

令和四年十二月

住所氏名記載なし 様

(八十歳)

ほんやりと、毎日、暮らしては、分からなかった、戦争のことを教えてもらいました。

ありがとうございます。

二十歳にもならない若い方が国の為と、亡くなられて今の安心して生活させてもらっている、思いました。

令和四年十二月

住所氏名記載なし様

(四九歳)

今私たちが幸せに暮らすことができてるのはすべて彼らのおかげだと思います。私達のため、日本のために散つていった若者たちがこんなにたくさんいたことは伝え続け

なくてはいけない。そしていつも彼らに感謝の念を持たなければならぬ。日本国民全員がそう感じるべきです。日本のために命を捧げた若者たちが安らかに眠れますように。

令和四年十二月

市川市 芝田様 (五十歳)

(五十歳)

前世で生き別れた、いいなずけに会いたい。特攻が復活しないことを切に願う。

令和四年十二月

(住所氏名年齢記載なし)

初めての来館となります。貴重な体験でした。また来館したいと思えます。

照明はLED化した方が良いかと思います。(チラツキ等があるので)

令和四年十二月

東京都 田代様 (五五歳)

同じ年齢の方々が予科練習

生として、国の為を張つてくれたから今がある。それを心の中にきざんで生きていきます。

令和五年一月

住所記載なし 雨谷様

(一七歳)

ここ二十〜三十年成長してないと言われる日本ですが、まだまだ頑張つて、自分のため、家族のため、日本のため社会にこうけんできる様頑張りたい!!

令和五年一月

和光市 宮越様 (七二歳)

今日は土浦においてになった倫理研究所の研卒生をお連れしました。

何回伺つても泣いてしまいました。

令和五年一月

土浦市 鶴川様 (七六歳)

何度、訪れたでしょう！

その度に、やはり涙が出ますが、桜も見つつ、伺いました。

桜が今日は、涙雨、さびしく感じます。次回は、また晴れの日に伺います。ありがとうございます。

令和五年三月

鹿嶋市 氏名不詳

(七四歳)

桜が満開の今日、久しぶりに雄翔館に皆様の勇敢な姿を心に刻みたいと思いいました。今日で、何回目でしょうか、来るたびに心が洗われます。

今日は、天井に飾っております写真一人ひとりに名前とお声掛けしました。写真を拝見し、表情、名前、日付を確認しながら、ぐるっと回ると四十分はかかりました。「こんなにお亡くなりになられたの？」改めて、戦争への憤り

を感じました。

私は、今、五十歳です。皆様が残して下さった「平和」をいつまでも守っていつて欲しいです。戦争で勇敢に戦った皆様、この平和をありがとうございます。毎日、感謝しています。

自衛官の皆様も日本を守

てくださって、ありがとうございます。お身体に気を付けて・・・。

令和五年三月

千葉市 森山様

国想い、若くして散った若者達、今、日本国のなげな

令和五年三月

鎌ヶ谷市 溝口様

色々な歴史があつて面白かつた！

令和五年四月

住所不詳 上原様

(小学生)

### (公財)海原会寄付者芳名簿

(敬称略) (単位千円)

- 二〇 武器学校OB会(非会員)茨城
- 一〇 田辺みゆき(非会員)神奈川県
- 一〇 宮寄 満夫(非会員)千葉
- 五 徳永 三好(甲13)茨城
- 五 小林 恒徳(甲15)大阪
- 五 塩澤 貞夫(甲16)東京
- 一〇 小澤 浩子(甲14遺)東京
- 四〇 桑島 敦好(乙24)東京
- 五 樋口 三郎(甲13)新潟
- 五 豊田重二郎(乙22)福岡
- 二五 須田 忠夫(一般)東京
- 五 フジワラトシ(非会員)不明
- 五 須田 孝(一般)東京
- 二〇 近藤 新市(非会員)愛知
- 五 石井 裕(特1)神奈川県
- 五 松浦 健三(甲14)栃木
- 五 山口 久雄(乙24)神奈川県
- 五 岡本 正人(乙22)埼玉
- 一〇 三屋 益雄(非会員)東京
- 五 豊田重二郎(乙22)福岡
- 五 酒井 陽太(一般)東京

海原会へのご芳志

誠に有難うございました。

### 【お知らせ】

事務局は、令和五年十二月二十八日から令和六年一月三日まで年末年始休暇のため不在となります。

### 事務局日誌

七月

一日

編集委員長引継ぎ  
於 保坂理事宅

編集委員長業務引継ぎ  
の為、平野理事、塚理事、行方事務局次長が  
訪問

三日

理事長来局  
於 事務局

安井理事長が業務指導  
のために事務局を訪問

八日

酒井副理事長告別式  
於 うしくあみ斎場

出席者 安井理事長、  
平野理事、山下理事、

行方事務局次長  
八日

#1編集会議

於 事務局

機関誌予科練の編集会議を行った。

出席者 塚理事、平野理事、行方事務局次長、工藤委員、原委員、横張委員

十日

小さな展示室模様替

於 雄翔館

平野理事、行方事務局次長

十五日

青宿祭り

於 青宿会場

理事長が阿見町青宿主催の夏祭りに参加

二十一日

役員来所

於 事務局

小野評議員、六車顧問が事務局を訪問した。

二十六日

NHK記者来所

於 事務局

NHK水戸放送局記者が行方事務局次長の取材に来所した。

二十七日

三者会同

於 事務局

出席者 予科練平和記念館長、豊崎学芸員、阿見観光ガイド

二十七日

阿見町秘書課長来所

於 事務局

阿見町秘書課長他三名の職員が業務調整のため来所

三十一日

武器学校副校長見送

於 武器学校

平野理事が、定年退官で離校する副校長見送りに参加

八月

四日

阿見町観光ガイド支援

於 雄翔館等

阿見町観光ガイドが実施する霞ヶ浦高校生徒のガイド研修会を平野

理事、行方事務局次長が支援した。

武器学校総務部長見送

於 武器学校

平野理事が、定年退官で離校する総務部長見送りに参加した

十七日

戸張氏お通夜出席

於 うしくあみ斎場

予科練平和記念館歴史調査員の戸張氏お通夜に平野理事が出席した。

十八日

阿見町観光ガイド支援

於 雄翔館等

阿見町観光ガイドが実施する霞ヶ浦高校生徒のガイド研修会を平野理事、行方事務局次長が支援した。

二十日

株式会社UTK代表取

締役来所

於 事務局&雄翔園

雄翔園池水質改善事業の協力者である同社社

長が現地確認のため来所した。

二十三日

武器学校長表敬訪問

於 武器学校

安井理事長、星指副理事長、平野理事が学校長を表敬

二十八日

武器学校長見送

於 武器学校

平野理事が、定年退官で離校する武器学校長の見送りに参加

二十六日

NHK記者来所

於 事務局・武器学校

NHK水戸放送局記者が行方事務局次長の取材に来所した。





海原会会員の皆様へ

小さくてもあたたかい

# 一日葬 家族葬

お葬式のご依頼や  
「もしものとき」に  
備えた事前のご相談  
年中無休で承ります

相談  
見積  
無料

お客様満足度  
**99%**※

※当社施行アンケート調べ  
自宅葬・一日葬、お別れ会のほか、  
ご希望に合わせた  
お葬式プランがございます。

新型コロナウイルス感染拡大防止に万全を期しています。

## お墓

お墓のことなら何でもご相談ください。墓石工事は信頼の10年間の保証書付きです。

### 墓所工事

標準価格  
(10万円以上)の  
**10%割引**

サービス提供エリア:  
関東・関西・東海



「お墓のお引越しガイド  
&事例集」

無料で資料を差し上げます。

## お葬式

葬儀一式をセット化した「葬儀式セットプラン」を各種ご用意。最適なプランをお選びいただけます。

### 葬儀

祭壇標準価格の

**20%割引**

※一部斎場、一部商品は除く。  
新花で送る家族葬は  
優待料金  
サービス提供エリア:関東



「お葬式の流れが  
わかる100項目」

無料で資料を差し上げます。

## お仏壇

仏壇店は首都圏に2店舗(国分寺・千葉)。伝統型仏壇や家具調仏壇、手元供養商品まで豊富な品揃えです。

### 仏壇

店頭価格の

**25%割引**

※ただし、催事特価品と  
仏具小物、手元供養商品  
は対象外  
サービス提供エリア:関東



「お仏壇カタログ」  
「特選 お位牌」

無料で資料を差し上げます。

お問い合わせは  
海原会事務局へ

# 029-886-5400

お問合せの際は、「予約練を見た」とお申し出ください。

MAO  
MEMORIAL ART OHNOYA



## メモリアルアートの大野屋

<http://www.ohnoya.co.jp>



「予約練」第479号11・12月号

昭和53年7月26日第3種郵便物認可(隔月奇数月1回1日発行)

発行人

安井 剛

発行所

300-0301

公益財団法人 海原会

茨城県稲敷郡阿見町青宿489番地1  
(旗輝ビル3階)

郵便振替  
0014019154332  
0029186164002

定価500円